

「先導的大学改革推進委託事業」

獣医学教育の改善・充実に向けた調査研究

2025 年度成果報告

山口大学共同獣医学部

本報告書は、文部科学省の先導的大学改革推進委託費による委託業務として、国立大学法人山口大学が実施した令和7年度先導的大学改革推進委託事業（調査テーマ：獣医学教育の改善・充実に向けた調査研究）の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

目次

I. 事業概要	1
【1】事業の背景と目的.....	2
【2】事業の実施体制および実施内容	4
1. 獣医学教育の改善・充実に向けた調査研究.....	4
2. 業務実施体制.....	6
II. 成果報告	12
1. 獣医学コアカリ改訂に係る調査研究と改訂作業	13
1) 2026 年度版獣医学コアカリへ作成作業	13
2) 開催会議一覧]	13
3) 議論の概要とコアカリ改訂方針の決定.....	13
4) 2026 年度版獣医学コアカリに向けた改訂方針	14
2. 産業動物獣医師や公務員獣医師の養成・確保対策.....	18
3. 生体を利用しない獣医学代替実習の実施方策	20
1) 動物代替法検討委員会.....	20
2) 獣医学教育における動物福祉を検討する委員会	20
3) 生体を用いない獣医学実習コンテンツ.....	21
4. 国際水準の獣医学教育の実現に向けた調査研究	23
1) EAEVE における獣医学教育改善の検討状況（鈴木）	23
2) アジアの獣医学教育改善の検討状況（渋谷・松脇・佐藤晃）	26
3) 米国獣医師会（AVMA）との意見交換（佐藤）	30
4) オーストラリアの獣医学教育について（鈴木）	32
5) まとめ（莉和）	41
5. 総括.....	42

I . 事業概要

【1】事業の背景と目的

近年、食の安心・安全に対する関心の高まりとともに、アニマルウェルフェアへの理解や、ペットを伴侶動物（コンパニオン・アニマル）として家族同然に慈しむ関係性の深化など、獣医学を取り巻く社会情勢は劇的に変化している。また、グローバル化による食品流通網の拡大と迅速化に加え、地球温暖化に伴う生態系の変容が、食の安全への脅威や人獣共通感染症のボーダレス化を促進しており、国民の健康を取り巻く環境はかつてないリスクに晒されている。

このような世界規模の環境変化の中、人の健康、動物の健康、そして環境の健全性を不可分なものとして一体的に捉える「ワンヘルス（One Health）」の理念が、人類の福祉を支える基盤として広く浸透するに至った。この概念の下では、環境保全から動物の健康維持、さらには公衆衛生に至るまでを包括的に管理することが不可欠な事項とされている。その結果、獣医師の職責は、個体診療という従来の枠組みを越え、安全な食肉供給の監視、感染症の水際対策、さらには環境保護へと多角的に拡大してきた。このように、生命科学の専門知を備えた獣医師が果たすべき役割は極めて多様化しており、持続可能な社会を構築する上での重要性は一段と高まっている。

こうした獣医師が担う役割の重要性が増す一方で、我が国では家畜診療を行う産業動物獣医師や、行政組織で公衆衛生や家畜衛生を支える公務員獣医師の不足が恒久化している。このような慢性的な獣医師不足は、家畜伝染病の防疫体制や食品の安全監視機能の低下を招く恐れがあり、ひいては人々の食の安全や健康を維持する社会基盤そのものを揺るがしかねない深刻な課題となっている。前述の通り、獣医師が果たすべき役割は極めて多様化しており、持続可能な社会を構築する上での必須の存在（エッセンシャルワーカー）として、その人材確保と体制整備の重要性は一段と高まっている。

これまで獣医学教育を担う獣医系大学の教員は、世界の諸問題に対応できる獣医師を育てるために獣医学教育の国際化を重要な課題と考え、2008年に文部科学省に「獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」（以下、協力者会議）を設置し、多くの議論と検討を行った結果、獣医学教育改善目標として「教育研究組織体制の充実」、「獣医学教育モデル・コア・カリキュラム（以下、獣医学コアカリ）の作成」、「獣医学教育第三者評価体制の確立」、「獣医学共用試験の導入」、「獣医臨床教育病院と実習環境の整備」を5本柱とする「国際水準の獣医学教育の実施に向けた改革工程」（以下、改革工程）を取りまとめた（図1）。

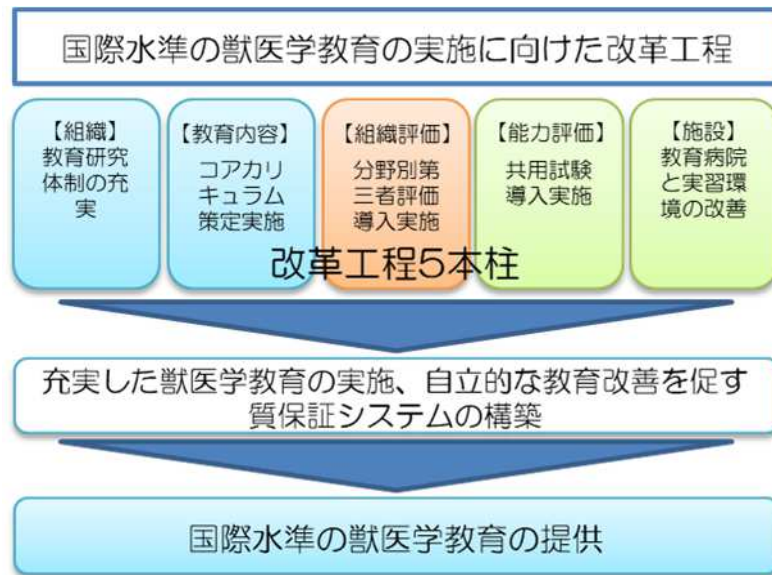


図 1. 国際水準の獣医学教育実施に向けた改革工程

この改革工程にしたがって、充実した獣医学教育の実施と自律的な教育改善を促す質保証システムの構築が行われ、2012 年と 2019 年に獣医学教育改善状況の調査研究を実施した。2024 年度からは第 3 期となる「獣医学教育の改善・充実に向けた調査研究」を実施し、改革工程のフォローアップや獣医学コアカリ内容の過不足、今後の教育改善のための方策等について調査研究を行った。

2025 年度の本事業では、2024 年度に実施した調査研究を踏まえ、獣医学コアカリの発展的改訂、動物福祉へ配慮した新しい獣医学教育実習の在り方に関する検討、産業動物獣医師や公務員獣医師の養成・確保に関する検討等を行うことで、獣医学教育の高度化と国際化の推進を目的として実施した。

【2】事業の実施体制および実施内容

1. 獣医学教育の改善・充実に向けた調査研究

1) 実施方針

本事業では、獣医学コアカリ改訂に向けた調査研究、産業動物獣医師や公務員獣医師の養成・確保対策の検討、生体を利用しない獣医学代替実習実施方策の検討、国際水準の獣医学教育の実現に向けた調査研究を実施し、これらの議論および2024年度に実施した「獣医学教育の改善・充実に向けた調査研究」の結果等を踏まえて、現行の2019年度版獣医学コアカリの改訂を行った。なお、業務の実施にあたっては、全国大学獣医学関係代表者協議会（以下、「全国協議会」）内に設置されている獣医学教育改善検討委員会、獣医学国際化検討委員会、実習における動物代替法導入に関する検討委員会（以下、「代替法検討委員会」）、獣医学教育における動物福祉を検討する委員会（以下、「動物福祉委員会」）等と連携して実施し、獣医学教育改善検討委員会・執行部会（以下、「執行部会」）が全体を統括して効率的かつ精緻に実施した。

2) 事業内容および調査研究手法

（1）獣医学コアカリ改訂に係る調査研究と改訂作業

本調査研究では、全国協議会・獣医学教育改善検討委員会委員と連携して実施し、執行部会の統括の下で、「獣医学コアカリ検討有識者会議」（以下、「コアカリ有識者会議」）および「獣医学教育将来検討委員会」（以下、「将来検討委員会」）を設置した。これらの委員会により、2024年度に実施した「獣医学教育の改善・充実に向けた調査研究」の結果等を踏まえ、獣医学コアカリの改訂やワンヘルス教育に関する議論を行った。会議は、対面会議とともに、Web会議やメール会議などを活用し効率的かつ効果的に開催した。これらの会議を通して、関係者間での意見交換により合意形成を行った。

コアカリ有識者会議および執行部会の委員については、「獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」（第1期、第2期）の内容や獣医学コアカリの内容をについて深い知見を持つ者を選出した。また、将来検討委員会の委員は今後の獣医学教育を担う次世代の教員で構成した。これらの会議の構成員の人选にあたっては文部科学省高等教育局専門教育課教育振興係（以下、「専門教育課」）と協議し、その同意の下で決定した。

コアカリ有識者会議および執行部会では、2024年度に実施した獣医学コアカリに係るアンケート調査における回答結果を検討することで、獣医学コアカリの改善点等が的確に把握できる調査項目およびその内容を構成員の合意の下で

策定した。具体的には、2024 年度に実施した獣医学コアカリに関するアンケート調査に基づき、2019 年度版獣医学コアカリの全体目標、一般目標、到達目標の各項目と内容を検討し、改訂作業を実施した。改訂作業はコアカリ有識者会議が統括し、全ての獣医学コアカリ科目（51 講義科目、19 実習科目）において正副 2 名の責任者からなる改訂作業ワーキンググループ（以下、改訂作業 WG）を設置し（総勢 100 名程度、委員名簿は別紙 1 コアカリを参照）、専門性の高い教員等により改訂内容を慎重に精査し行った。最終稿の作成に先立ち、各種獣医関係団体（日本獣医学会、日本獣医師会、全国農業共済協会、関係省庁、公務員獣医師、国公立大学獣医学協議会、日本私立獣医科大学協議会、全国協議会等）へ送付し、意見等を聴取した。最終的に、令和 8 年度（2026 年度）版コアカリは全国協議会ホームページで公開する。また、獣医学コアカリ英文もホームページへ掲載・公開することで我が国の獣医学教育手法を海外へ発信する。なお、将来の獣医学教育の在り方について、執行部会、獣医学コアカリ有識者会議、国際化検討有識者会議および将来検討委員会により検討した。

2) 産業動物獣医師や公務員獣医師の養成・確保対策の調査研究

本調査研究は、2024 年度「獣医学教育の改善・充実に向けた調査研究」の結果等を踏まえ、農林水産省、厚生労働省、環境省、日本獣医師会の関係者と意見交換を行った。また、農林水産省と連携して設置されている「獣医系 17 大学産業動物分野ネットワーク」等と執行部部会が連携して産業動物獣医師や農林水産分野公務員獣医師の養成・確保のための工夫を検討した。さらに、都道府県の家畜衛生に関わる公務員獣医師で構成される全国家畜衛生職員会等と意見交換を行うことで、現場の公務員獣医師（家畜衛生獣医師）の状況について情報共有を行った。これらの議論を踏まえて、産業動物獣医師や公務員獣医師の確保のために、獣医学教育に何をどのように盛り込むことが適切かをコアカリ有識者会議等において議論し、関係者間での合意形成を行った。

3) 生体を利用しない獣医学代替実習実施方策の調査研究

本調査研究は、コアカリ有識者会議が代替法検討委員会や動物福祉委員会等と連携し、2024 年度「獣医学教育の改善・充実に向けた調査研究」の結果等を踏まえ、生体を利用しない獣医学代替実習を獣医学教育に適切に組み込み、教育効果を最大限に発揮するための議論を行った。また、各大学で用いている代替実習コンテンツの共有を目的として、第 68 会日本獣医学会学術集会（宮崎大学主催）において、獣医学教育改革シンポジウム「新しい獣医学教育—生体を用いない獣医学実習と産業動物の参加型臨床実習—」を開催すると共に、獣医学教育に関するワークショップを実施する事で、生体を用いない代替実習の実施方法に

ついて議論する場を設け、全国の獣医系大学教員間での情報共有と実習教育の今後の在り方について議論した。さらにこれらの情報は、全国協議会のホームページに獣医学教育改善の好事例として掲載誌するとともに、インドネシア・ガジヤマダ大学で開催した AAVS 主催 VetEd Asia2026 シンポジウムで発表し、アジア獣医系大学への情報提供を行った。

4) 国際水準の獣医学教育の実現に向けた調査研究

本調査研究では、全国協議会・獣医学国際化検討委員会と連携し、「国際化検討有識者会議」を組織した。2024 年度実施の「獣医学教育の改善・充実に向けた調査研究」の結果等を踏まえ、国際水準の獣医学教育の実現に向けた検討を行った。具体的には、同会議の委員がアイルランド・ダブリンで開催された「第 38 回 EAEVE（欧州獣医学教育機関協会）総会」に参加し、欧州における教育改善の現状を調査した。また、インドネシア・ジョグジャカルタで開催された「第 23 回 AAVS（アジア獣医科大学協会）総会」および「VetEd Asia 2025 シンポジウム」にも参加した。また、同会議に参加した WOA（国際獣疫事務局）、AVMA（全米獣医師会）、AAVS 等の関係者と意見交換を行い、国際的な獣医学教育に関する情報を収集した。さらに、AVMA 関係者からは国際認証ワーキンググループ（IWAG）に関する情報収集も行った。

2. 業務実施体制

山口大学が事業代表者となり、コアカリ有識者会議、国際化検討有識者会議、将来検討委員会の委員を協力者として配置し本事業を実施した。全体の作業は 7 名の委員で構成する執行部会が統括した。各有識者会議の委員は、これまでの実績を考慮し、全国協議会の獣医学教育改善検討委員会および獣医学国際化検討委員会のメンバーを中心に選出することで、これらの委員会と連携をはかるとともに、全国協議会を通して国内の獣医学教員と強固なネットワークを構築し、獣医学コアカリ改訂作業をすすめた。将来検討委員会委員は次世代の獣医学教育を担う教員より選出し、本事業の協議に加わるとともに、将来の獣医学コアカリの在り方について、ともに検討した。なお、各委員の人選にあたっては、専門教育課と協議し、その同意の下で選出した（以下、組織図および委員一覧を参照）。

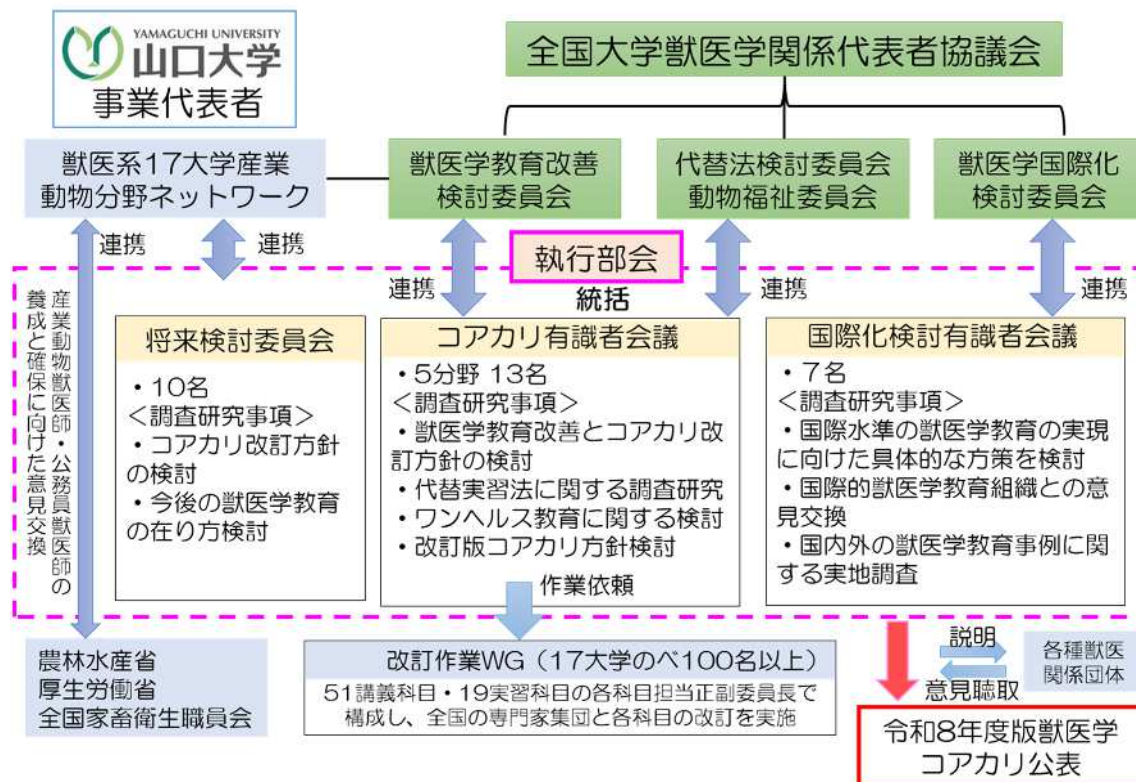


図2. 事業実施体制組織図

獣医学教育改善検討委員会委員・執行部会委員一覧

氏名（ふりがな） ○座長	所 属	類似の調査研究の実績、調査内容に関する知識・知見、人的ネットワーク等
○佐藤 晃一・教授 （さとうこういち）	山口大学	2019 年と 2024 年に当該委託事業の委員長を務め、獣医学教育・組織・施設等全体にわたる知識を有する。また全国協議会・獣医学教育改善検討委員会委員長でもあり全大学に強いネットワークを有する。また、FAVA（アジア獣医師会連合）・獣医学教育部会座長（2022-2024 年）、2025 年からはアメリカ獣医大学協会の国際獣医学教育委員会 CIVME・アジア地域代表に就任するなど、国際獣医学教育についても熟知している。
荻和 宏明・教授 （かりわひろあき）	北海道大学	2019 年、2024 年に当該委託事業の委員を務め、獣医学教育全体にわたる知識を有し国際性も高い。また、日本獣医学会・公衆衛生分科会の委員を歴任しており、当該分野に強いネットワークを有する。
滝口 満喜・教授 （たきぐちみつよし）	北海道大学	2019 年、2024 年に当該委託事業の委員を務め、獣医学教育全体にわたる知識を有する。また、昨年度まで、国立大学獣医学協議会委員長や北海道大学獣医学部長の任に就いており獣医学全般についての知見が深い。
山下 和人・教授 （やましたかずと）	酪農学園大学	2019 年、2024 年に当該委託事業の委員を務め、獣医学教育小動物臨床全体にわたる知識を有する。また、獣医麻酔学の専門家として講義実習を行っている。
猪熊 壽・教授 （いのくまひさし）	東京大学	2019 年、2024 年に当該委託事業の委員を務め、獣医学教育大動物臨床全体にわたる知識を有する。また、日本獣医学会・理事長を務めており、幅広いネットワークを有する。産業動物・大動物繁殖学の専門家として講義実習を行っており、大動物獣医学への知見が深い。
志水 泰武・教授 （しみずやすたけ）	岐阜大学	2019 年、2024 年に当該委託事業の委員を務め、獣医学教育全体にわたる知識を有する。また、国公立大学獣医学関係代表者協議会・副会長を務めると共に、獣医生理学の専門家として基礎獣医学系に強いネットワークを有する。
堀 正敏・教授 （ほりまさとし）	東京大学	全国協議会・会長として全国の獣医系大学を取りまとめ、幅広いネットワークを有している。また、昨年度まで共用試験 vetCBT 実施委員長の任に就いており、獣医学コアカリ内容を熟知している。

獣医学コアカリ検討有識者会議委員一覧

氏名（ふりがな） ○委員長	所 属	担当教育分野	類似の調査研究の実績、調査内容に関する知識・知見、人的ネットワーク等
------------------	-----	--------	------------------------------------

○佐藤 晃一・教授 (さとうこういち)	山口大学	統括	2019 年、2024 年に当該委託事業の委員長を務め、獣医学教育全体にわたる知識を有する。また全国協議会・獣医学教育改善検討委員会委員長でもあり全大学に強いネットワークを有する。
志水 泰武・教授 (しみずやすたけ)	岐阜大学	導入 ・基礎	2019 年、2024 年に当該委託事業の委員を務め、獣医学教育全体にわたる知識を有する。また、国公立大学獣医学関係代表者協議会・副会長を務めると共に、獣医生理学の専門家として講義実習を行っている。
山本 欣郎・教授 (やまもとよしお)	岩手大学	導入 ・基礎	2024 年に当該委託事業の委員を務め、岩手大学において獣医解剖学の専門家として講義実習を行っており、基礎獣医学、導入獣医学教育について知識を有する。
桑村 充・教授 (くわむらみつる)	大阪公立大学	病態	2024 年に当該委託事業の委員を務め、獣医学教育全体にわたる知識を有する。また、獣医病理学の専門家として講義実習を行っている。
堀本 泰介・教授 (ほりもとたいすけ)	東京大学	病態	2024 年に当該委託事業の委員を務め、東京大学において獣医微生物学の専門家として講義実習を行っており、病態獣医学教育について知識を有する。
苅和 宏明・教授 (かりわひろあき)	北海道大学	応用	2019 年、2024 年に当該委託事業の委員を務め、獣医学教育全体にわたる知識を有する。また、獣医公衆衛生学の専門家として講義実習を行っている。
壁谷 英則・教授 (かべやひでのり)	日本大学	応用	2024 年に当該委託事業の委員を務め、日本大学において獣医公衆衛生・獣医免疫学の専門家として講義実習を行っており、応用獣医学教育について知識を有する。
長谷川 貴史・教授 (はせがわたかし)	大阪公立大学	伴侶動物 臨床	2024 年当該委託事業の委員を務め、獣医学教育全体にわたる知識を有する。また、獣医臨床学の専門家として講義実習を行っている。
山下 和人・教授 (やましたかずと)	酪農学園大学	伴侶動物 臨床	2019 年、2024 年に当該委託事業の委員を務め、獣医学教育全体にわたる知識を有する。また、獣医麻酔学の専門家として講義実習を行っている。
遠藤 泰之・教授 (えんどうやすゆき)	鹿児島大学	伴侶動物 臨床	2024 年に当該委託事業の委員を務め、鹿児島大学において獣医内科学の専門家として講義実習と臨床を行っており、臨床獣医学教育について知識を有する。また、学部長の任に就いており獣医学全般についての知見が深い。
滝口 満喜・教授 (たきぐちみつよし)	北海道大学	伴侶動物 臨床	2019 年、2024 年に当該委託事業の委員を務め、獣医学教育全体にわたる知識を有する。ま

			た、獣医内科学の専門家として講義実習を行うとともに、前学部長として獣医学全般についての知見が深い。
高橋 史昭・教授 (たかはしふみあき)	北里大学	大動物 臨床	2024 年に当該委託事業の委員を務め、北里大学において大動物臨床学の専門家として講義実習を行っており、臨床獣医学教育について知識を有する。
猪熊 壽・教授 (いのくまひさし)	東京大学	大動物 臨床	2019 年、2024 年に当該委託事業の委員を務め、獣医学教育全体にわたる知識を有する。また、産業動物・大動物繁殖学の専門家として講義実習を行っており、大動物獣医学への知見が深い。

国際化検討有識者会議委員一覧

氏名（ふりがな） ○委員長	所 属	類似の調査研究の実績、調査内容に関する知識・知見、 人的ネットワーク等
○荻和 宏明・教授 (かりわひろあき)	北海道大学	2024 年に本有識者会議の委員長を務め、国際水準の獣医学教育に関する幅広い知識を有する。また、所属大学は EAEVE 認証を取得しており、国際的な獣医学教育評価についても詳しい。
鈴木 一由・教授 (すすきかずゆき)	酪農学園大学	2024 年に本有識者会議の委員を務め、国際水準の獣医学教育に関する幅広い知識を有する。また、所属大学は昨年 EAEVE 国際認証を取得しており、その際に評価対応の主担当として活躍した。
松脇 貴志・准教授 (まつわきたかし)	東京大学	2024 年に本有識者会議の委員を務め、国際水準の獣医学教育に関する幅広い知識を有する。また、アジア獣医大学協会（AAVS）の事務局長を務めており、アジア各国の獣医系大学との強いネットワークを有する。
渋谷 周作・准教授 (しぶたにしゅうさく)	山口大学	2024 年に本有識者会議の委員を務め、国際水準の獣医学教育に関する幅広い知識を有する。また、所属大学は EAEVE 認証を取得しており、国際的な獣医学教育評価についても詳しい。
堀 正敏・教授 (ほりまさとし)	東京大学	2024 年に本有識者会議のオブザーバーを務めた。全国協議会・会長として全国の獣医系大学を取りまとめ、国内外の獣医系大学に幅広いネットワークを有している。
滝口 満喜・教授 (たきぐちみつよし)	北海道大学	2024 年に本有識者会議のオブザーバーを務めた。昨年度まで、北海道大学獣医学部長の任に就いており、国際的なネットワークも有する。

佐藤 晃一・教授 (さとうこういち)	山口大学	2024 年に本有識者会議のオブザーバーを務めた。また、FAVA（アジア獣医師会連合）・獣医学教育委員会の座長（2022-2024 年）、2025 年からはアメリカ獣医大学協会の国際獣医学教育委員会 CIVME・アジア地域代表に就任するなど、国際獣医学教育について熟知している。
-----------------------	------	---

獣医学教育将来検討委員会委員一覧

氏名（ふりがな）	所 属	担 当 教 育 分野	氏名（ふりがな）	所 属	担当教 育分野
村田 幸久・准教授 (むらたたくひさ)	東京大学	導入・ 基礎	岡松 優子・教授 (おかまつゆうこ)	北海道大 学	導入・ 基礎
壁谷 英則・教授 (かべやひでのり)	日本大学	病態・ 応用	伊藤 直人・教授 (いとうなおと)	岐阜大学	病態・ 応用
中川 貴之・教授 (なかがわたかゆ き)	東京大学	小 動 物 臨床	高木 哲・教授 (たかぎさとし)	麻布大学	小動物 臨床
山崎真太・教授 (やまさきまさひ ろ)	北海道大学	小 動 物 臨 床	佐藤礼一郎・教授 (さとうれいいちろ う)	宮崎大学	大動物 臨床
伊藤めぐみ・准教授 (いとうめぐみ)	帯広畜産大 学	大 動 物 臨床	松脇 貴志・准教授 (まつわきたかし)	東京大学	国際化

Ⅱ．成果報告

1. 獣医学コアカリ改訂に係る調査研究と改訂作業

1) 2026 年度版獣医学コアカリへ作成作業

改訂にあたっては以下の会議を開催し、コアカリ改訂方針とその手段の詳細について議論すると共に、今後検討すべき課題について検討した。会議を通して、様々な議論を行い、最終的に 2026 年度版コアカリを作成するとともに（別紙 1）、国際通用性を考慮して英語版コアカリを（別紙 2）、また今後のコアカリ準拠共通テキストの指針となるように各科目のキーワード一覧（別紙 3）を作成した。

2) 開催会議一覧]

- 2025 年 5 月 26 日：執行部会
 - 2025 年 6 月 13 日：執行部会
 - 2025 年 6 月 25 日：将来検討委員会
 - 2025 年 7 月 24 日：コアカリ有識者会議
 - 2025 年 7 月 28 日：コアカリ改訂作業 WG 会議（別日でも 2 回開催）
 - 2025 年 9 月 2 日：執行部会・有識者会議合同会議
 - 2025 年 9 月 8 日：執行部会・コアカリ将来検討委員会合同会議
 - 2025 年 9 月 25 日：コアカリ有識者会議
 - 2025 年 10 月 22 日：コアカリ有識者会議
 - 2025 年 12 月 16 日：コアカリ有識者会議
 - 2026 年 1 月 7 日：執行部会・コアカリ有識者会議・国際化検討有識者会議・将来検討委員による合同会議
 - 2026 年 2 月 10 日：執行部会・コアカリ有識者会議合同会議
- ※他：メール会議多数

3) 議論の概要とコアカリ改訂方針の決定

（1）会議を通して議論した主な内容

会議では、単なるカリキュラムの修正にとどまらず、日本の獣医学教育が直面している課題と将来像について多角的な議論を行なった。

- 獣医学教育の国際化と「国際水準」の定義：欧米の基準を追従するのではなく、日本の獣医師の職域で必要とされる知識・技術を確実に教え、教育システムを自律的に改善できる PDCA サイクル体制を構築することが重要である。
- ワンヘルス教育の推進：G7 広島サミット等の国際的な動向を踏まえ、公衆衛生や感染症対策における獣医師の役割を重視し、応用獣医学分野を中心にワンヘルス教育の在り方を検討した。

- 産業動物・公務員獣医師の養成と確保：社会的ニーズが高い一方で獣医師が不足しているこれらの分野に対し、現場実習などを通じて学生に現場を体験させる重要性や、教育内容に何を盛り込むべきかを議論した。
- 生体を利用しない代替実習の導入：動物福祉の観点から、スキルスラボの活用や代替実習コンテンツの共有、さらにはコアカリ実習科目への適切な組み込みについて検討した。
- 2040 年問題への対応：少子化による 18 歳人口の減少を見据え、教育体制の再編や国公私立大学の連携、オンライン・オンデマンド教育の活用について議論した。

4) 2026 年度版獣医学コアカリに向けた改訂方針

現行の 2019 年度版コアカリをベースに、以下の具体的な方針と方法で改訂作業を進めた。

- 改訂の実施体制：執行部会が全体を統括し、51 の講義科目と 19 の実習科目ごとに、全国の専門家（正副責任者）約 100 名からなる改訂作業 WG を設置した。
- 重複の明確化とキーワード付与：各到達目標にキーワードを付与し、科目間の重複を検索可能にした。用語については「獣医疾患名用語辞典」や「獣医解剖・組織・発生学用語」に基づき、一般的な名称への統一を図った。
- 国際発信のための英文化：改訂されたコアカリは英訳し、日本の獣医学教育の手法を海外へ発信するツールとした。
- 用語の整理：例えば臨床分野における「症状」という用語を、将来的には「臨床徴候」へ統一していく方針が示されるなど、過渡期における用語の取り扱いについても検討した。

(2) 今後の検討課題

2026 年度版の公開後も継続して取り組むべき課題を検討した。

- 「統合型コアカリキュラム」への移行検討：現在の学科目制の壁を越え、卒業時に求められる資質・能力（デイ・ワン・コンピテンシー：D1C）を軸とした統合型教育への移行について、具体的な検討を進める。
- 第三者評価の改善：大学基準協会との意見交換を強化するためワーキンググループを再設置し、実情に即した教員数基準の策定や、国際認証基準の標準化を協議する。
- 実習教育の基盤強化：外部施設（食肉衛生検査場や産業動物臨床施設等）の確保を、大学単位ではなく全国協議会レベルで国や自治体と協議し、産業動物や行政職の現場実習を質・量ともに確保できる体制を構築する。

- 次世代獣医学教員による議論の場の継続：将来の獣医学教育の在り方（10～20年スパン）を検討するため、若手中堅教員を中心とした頻繁な意見交換の場を定期的に設ける。
- 疫学実習のコアカリ科目化について：疫学分科会より疫学実習をコアカリ科目化する強い要望があるが、全国17大学で均一に実施できる指導体制（人材確保）が不十分であることから、引き続き検討課題する。
- 獣医歯科学のコアカリ科目化について：軟部組織外科学ワーキンググループより獣医師科学のコアカリ科目化について提案があったが、他科目との内容の重複やコンセンサス形成の必要性から、令和8年度の改訂には盛り込まず、次回以降の改訂に向けて議論を尽くす。

（3）今後の獣医学コアカリの在り方

日本の獣医学教育は、2011年の獣医学コアカリ（図3参照）策定以来、国際水準への準拠を目指して改革を続けてきた。獣医学コアカリは、全国全ての獣医学学生が学ぶべき科目を明示するとともに、各科目で修得すべき内容を到達目標として記載しており、諸外国のカリキュラムと比較しても極めて優れた内容となっている。

一方で、2019年の改訂時には医学教育を参考に、卒業時に求められる資質・能力（D1C）を中心とした「統合型コアカリ」（図2参照）への移行を模索した。しかし、当時の検討では、単位数や教員配置が各大学で異なり全国一律の統合的教育体系を構築することが困難であることや、現行の獣医学共用試験（vetCBT・vetOSCE）が学科目制を前提として構築されており、これらとの整合性確保に向けた課題が解決されなかったことなどから、完全な移行は見送られた。

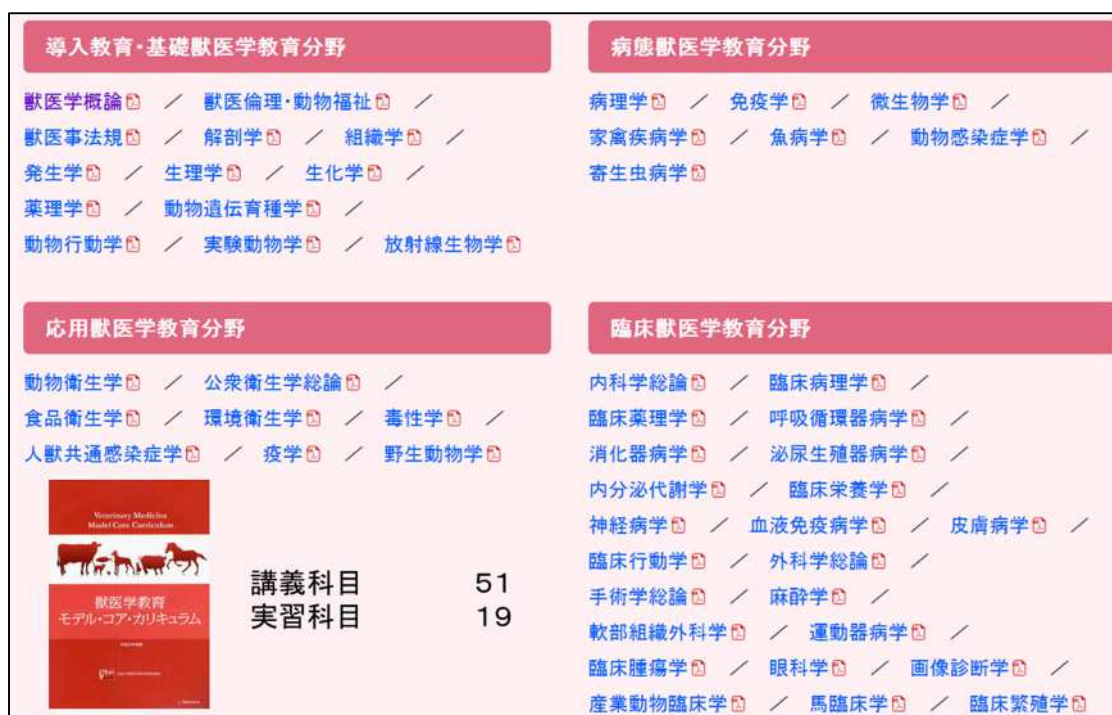


図3. 学科目に沿った現行の獣医学コアカリ

教えるべき科目に沿って各講義科目（51 科目）と実習科目（19 科目）の内容を明確にし、それぞれの科目におけるカリキュラムを到達目標として記載している。

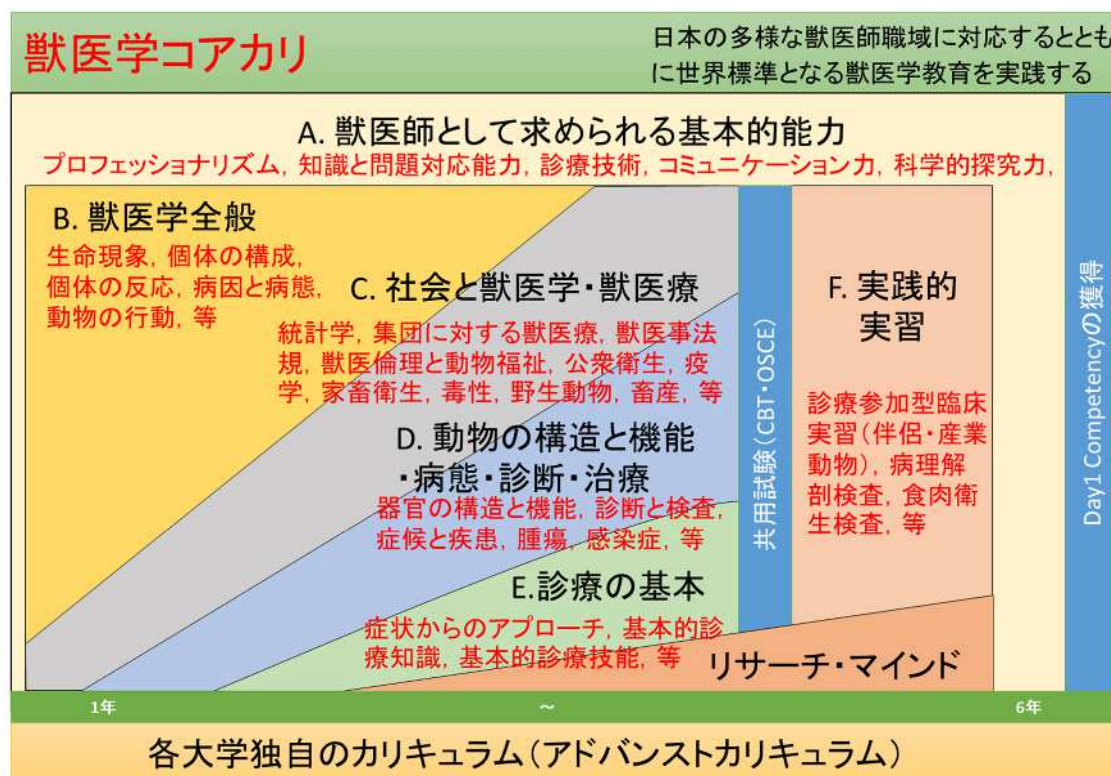


図4. D1C に沿った統合型コアカリ

卒業時に求められる資質・能力（D1C）を A～F の大項目に分け、各大項目で修得すべき能力を中項目として記載している。横軸を学年進行とすることで、学生は入学直後から「何をどのような過程を経て学び、卒業時にどのような能力を身に付けるのか」という全体計画を視覚的に理解することが可能となる。

本事業では、コアカリ有識者会議、国際化検討有識者会議および将来検討委員会の合同会議において、現行の「学科目型コアカリ」と「統合型コアカリ」の融合について多角的な議論を行った。

議論では、統合型コアカリの導入に賛成する意見が多数を占めた。その主な理由として、従来の学科目制教育では個々の知識を臨床現場や実践的課題と結びつけて体系化することが難しいのに対し、統合型は学生による知識の体系化に適している点があげられた。また、現在の獣医学コアカリは内容が詳細になりすぎているため教えるべき事項の精査が必要であることや、海外の教育評価において能力基盤型（Competency-based）の要求が強まっており、国際化の観点からも D1C を軸とした体系への移行が不可欠であるとの認識が示された。

一方で、現行の大学教員組織が「学科目単位」で固定されている現状では、科目の枠を超えた統合型教育の実施が困難である点や、教育を支える教員数が圧倒的に不足しており負担増が懸念される点など、導入を阻む現実的な障壁も浮き彫りとなった。そのため、当面は現行の学科目制を中心とした運用を維持しつつも、将来的な統合型コアカリへの移行を見据え、段階的に取り組みを進めることで合意した。その第一歩として、図5に示すように、現行の学科目型コアカリと D1C に基づく統合型コアカリを組み合わせ、学生自身が各科目と D1C の対応関係を視覚的に把握できる「カリキュラムマップ」の作成が提案された。

科目 NO	Subjects 授業科目名	Themes of Subjects 授業科目の主題 (全体目標)	Vet Diploma Policy (VDP) (◎=VDP達成のために、特に重要な事項、○=VDP達成のために重要)			
			A. 獣医師として求められる能力 豊かな人間性と獣医師としての正しい倫理観を			
			A-1 プロフェッショナリズム 人と動物の健康と福祉を守るという職責を自覚し、社会へ貢献する。	A-2 獣医学知識と問題対応能力 発展し続ける獣医学の中で必要な知識を身に付け、根拠に基づいた医療(evidence-based medicine(EBM))を基盤に、診断も踏まえながら、幅広い症候・病態・疾患に対応する。	A-3 診療技能と患者及びクライアントのケア 臨床技能を磨くとともにそれらを用い、また動物の苦痛やクライアントの不安感に配慮しながら、診療を実践する。	A-4 コミュニケーション能力 クライアントの心の背景を踏まえ、クライアントと良好な関係を築き、意思決定する。
S1	獣医学概論	獣医学概論は、獣医学の役割と全体像を明確に把握することが目標である。概論では獣医学、獣医療、獣医師に求められる獣医学哲学を学ぶ。獣医学史では人類と動物の関係における獣医学の歴史的考察と、日本の獣医学教育史を学ぶ。次いで現代日本における獣医師の使命と獣医療の概要、さらに諸外国の獣医師との比較論、国際貢献等を学習し、獣医師の社会的必要性と存在の意味を理解する。	○			
S2	獣医倫理・動物福祉	生命倫理学の基本原則を理解し、その上で獣医学および獣医療の基本理念としての獣医倫理・動物福祉の考え方を総合的に理解する。倫理性の豊かな獣医師として、獣医療、動物愛護と福祉、畜産の発展、教育、研究、環境保全、社会奉仕などに貢献するために獣医倫理を実践に応用できる資質を身につける。	○			

図 5. 学科目型コアカリと統合型コアカリによるカリキュラムマップ
縦軸に現行(図 1)の学科目型コアカリとその全体目標を配置し、横軸に統合型カリキュラム(図 2)の大項目・中項目を配置する。各学科目で修得する能力に対応する箇所に印を付けることで、学生は各科目の学習がどの D1C の修得につながるのかを直感的に理解できる。

現在、獣医学教育は「学科目の壁を越えた統合型教育への移行」、「国際標準への準拠」、そして少子化に伴う「2040 年問題(18 歳人口の急減)への対応」という、極めて重要な転換期にある。今後は、全国協議会・獣医学教育改善検討委員会が中心となり、ウェブ会議等も活用して、次世代を担う若手教員を交えながら頻繁な意見交換を継続することが不可欠である。さらに、大学関係者のみならず、ステークホルダー(省庁、自治体、関連団体等)や学生の声、社会の要請を柔軟に取り入れながら、自律的に改善(PDCA サイクル)し続ける教育システムの構築を目指すことが重要である。

2. 産業動物獣医師や公務員獣医師の養成・確保対策

執行部会およびコアカリ有識者会議内での意見交換に加え、各省庁(農林水産省、厚生労働省、環境省)や日本獣医師会、全国家畜衛生職員会との協議を実施し、産業動物獣医師および公務員獣医師の慢性的な不足と地域的な偏在を、深刻な喫緊の課題として共有した。

獣医学コアカリに関しては、これまでも獣医学教育に必要な内容を網羅してきたとの認識が示された。一方で、教育の実施方法については、単なる知識の習得にとどまらず、現場で求められる実践的な資質の強化が求められた。さらに、現行の獣医学コアカリは小動物臨床科目が重視されすぎているとの指摘もあり、少子化や伴侶動物の飼育頭数減少といった社会情勢の変化を見据え、獣医師が関わる幅広い職域のバランスを考慮したカリキュラムへと再検討することが提案された。また、産業動物臨床や家畜衛生に関する教育内容についても、伴侶動物臨床分野と同様に専門性を細分化・明確化し、学生にとって魅力あるカリキュラムとなるよう更なる改善が望まれた。

公衆衛生分野では、公務員獣医師の資質として、法規の読解力、高いコミュニケーション能力、調整能力に加え、経営的視点や課題解決能力を備えた「ジェネラリスト」の育成が重要であると指摘された。あわせて、ワンヘルス・アプローチの観点から、野生動物、環境保全、法獣医学に関する知識の重要性も提示された。

産業動物獣医師や公衆衛生獣医師の確保に向けた具体策として強調されたのは、複数の大学で成果が上がっている「低学年次からの早期暴露（アーリー・エクスポージャー）」である。学生が早い段階で産業動物臨床の現場や行政の役割を体験することが、将来の進路選択に直結するという認識で一致した。また、大学と現場（省庁・自治体・家畜保健衛生所等）の連携を深め、これまで以上に現役職員による出前講義やインターンシップを教育課程へ効果的に組み込む必要性も指摘された。さらに、女子学生の増加を踏まえ、大動物臨床等における労働環境の改善や、ライフイベントに配慮した働き方を学生に対しても提示することが必要であることが確認された。

以上の意見交換を踏まえ、産業動物獣医師や公務員獣医師の養成・確保に向け、今後検討すべき具体的な対策として以下の事項が共有された。

- 早期教育の推進：1・2年次の早い段階で、家畜保健衛生所、食肉衛生検査所、産業動物診療所等の見学・実習を行い、職域の広さと社会的使命を周知する。
- 裾野の拡大：自治体や関係団体と連携し、小・中・高校生に対しても獣医師の多様な役割を周知する啓発活動を実施する。
- 専門性の深化：高学年において、公務員業務や家畜衛生に特化した専門性の高い「アドバンスト科目」を設置し、実践的な学びを提供する。
- 外部リソースの活用：省庁や自治体の実務経験者を講師として招聘し、現場の実情や政策立案の醍醐味を伝える機会を積極的に創出する。
- ICTの活用：現場実習が困難な分野（食肉検査等）において、VRコンテンツやAIを活用した代替教材を導入し、質の高い教育を均一に提供する。

- 大学間連携：全 17 大学で共有可能なオンデマンド教材を共同制作し、限られた教員リソースで効率的に専門知識を教授するシステムを構築する。

これらの対策を大学、国、自治体が継続的に協議し実行することで、食の安全、感染症の防御、食資源の確保という重要な課題を担う獣医師の確保に繋がる。

3. 生体を利用しない獣医学代替実習の実施方策

1) 動物代替法検討委員会

(1) 常設スキルスラボの設置状況

常設スキルスラボは、新たに東京農工大学および宮崎大学で設置され、2025 年 9 月現在で計 15 大学となった。残る 2 大学についても設備自体は存在するが、常設形態をとるには至っていない。一方、産業動物分野のスキルスラボ整備は依然として全大学で不十分な状況にある。山口大学や岐阜大学で実施されたクラウドファンディングによる資金調達・整備事例などは、他大学においても有効な先行モデルとして参照されるべきである。

(2) 動物代替法を用いた実習の実施状況

基礎、応用、および実験動物学の分野では、ビデオ教材やコンピューター・シミュレーター（CS）の導入が進んでいる。特に解剖学分野では、市販の高度な CS 教材を学生が無料で利用可能な環境が整いつつある。他方、臨床分野では「シミュレーションのみでは補いきれない」という技術習得上の課題はあるものの、他分野の成功事例に倣い、積極的な教材活用を推進する必要がある。なお、各大学における分野別の導入状況や、市販・自作の別といった詳細については、別紙 4 を参照されたい。

(3) 教育の質の標準化と費用対効果の検討

教育の質を一定水準に保つためには、教材レベルの共通化が不可欠である。本事業では日本獣医学会学術集会において、各大学が代替法教材を持ち寄り、共有・議論を行う場を設けた。しかし、これら代替法教材の導入・維持には多大なコストを要するため、国庫補助の活用や受益者負担の在り方も含め、具体的な財源確保策を検討する必要がある。

※第 126 回全国大学獣医学関係代表者協議会・動物代替法検討委員会報告資料（岐阜大学・渡邊一弘教授）を改変した。

2) 獣医学教育における動物福祉を検討する委員会

(1) 獣医学教育における学生実習での動物生体使用調査

令和 2 年度に環境省および文部科学省が実施した調査のフォローアップとして、代替法検討委員会の協力を得て、2024 年 9 月から 10 月にかけて全 17 大学

を対象とした調査を実施した。本調査は共同獣医学課程（コアカリキュラム）の実習を対象とし、令和 5 年度の動物使用数を集計した。

本調査により、動物実験の 3R の原則（Replacement, Reduction, Refinement）に基づく適正化が着実に推進されていることが確認された。令和 2 年度および 3 年度の調査結果と比較し、ほとんどの実習科目で動物使用数が減少しており、特に苦痛カテゴリー C および D に該当する実習での減少が顕著であった。これは代替法の活用による改善が進んでいることを示唆しており、代替法検討委員会の報告とも整合している。ただし、前回の調査期間がコロナ禍による対面授業制限下であった点は、比較の際に留意が必要である。

一方、課題として、苦痛カテゴリー基準の相違があげられる。調査の過程で、苦痛カテゴリーの判定基準が大学間で必ずしも統一されておらず、同一内容の実習であっても異なるカテゴリーに分類されている事例が判明した。判定の標準化が今後の課題である。なお、本調査結果には患者動物（診療対象）は含まれていない。これを踏まえ、令和 2 年度の調査と同様に結果を外部公開するか否かについて、今後協議を行う必要がある。そのため、本報告書においては資料の公開は行わない。

（2）獣医学カリキュラムにおける生体利用実習の指針

現在、生体を利用した実習に関する指針は各大学が個別に公表しているが、全国協議会としての統一見解は存在しない。そのため、全国協議会でも指針を公表すべきである。

前提となるのは、生きた動物を使用することは獣医学教育に必須であること、使用する際は倫理的配慮に十分留意し、社会の理解を得ることである。具体的には、獣医学教育における倫理と動物福祉、獣医学実習における倫理的課題、法的あるいは規制上の考慮事項、ならびに動物福祉や実験動物に関する教育である。獣医学教育における動物の生体利用には倫理的責任と教育的効果の両方が求められ、動物福祉の向上、透明性の確保、倫理教育の強化を通じて社会的信頼の向上と獣医学の発展の実現を図る。

※第 126 回全国大学獣医学関係代表者協議会・獣医学教育における動物福祉を検討する委員会報告資料（北海道大学・森松正美教授）を改変した。

3）生体を用いない獣医学実習コンテンツ

（1）実施概要

我が国の獣医学教育プログラムは、動物福祉と倫理、バイオセーフティ、人獣共通感染症対策、農場や施設へのアクセスなどの各種制限の中で、学生個々のコンピテンシー・ベースの教育と評価をしなければならないという課題に直面し

ている。これらの課題を解決するために、獣医学教育では生体を用いた実習から、シミュレーションやデジタル手法への移行が加速している。本事業では、獣医学実習教育の好事例として、以下の5つの内容を取り上げ、第168回日本獣医学会学術集会（主催・宮崎大学）において獣医学教育改革シンポジウムを開催すると共に、実際に体験するためのワークショップを開催した。シンポジウム内容は、日本国内で幅広く周知するために、全国協議会ホームページで好事例として各コンテンツを動画とともに紹介している（<https://www.jaeve.org/modern-education/>）。また、ガジャマダ大学（インドネシア）で開催された第23回アジア獣医科大学協会総会（AAVS）においてこれらの内容を発表した（別紙5）。

（2）教育改革シンポジウムにおける各大学の発表概要

麻布大学からは、360°/VRを活用したビデオ中心の臨床スキル教育の成果が報告された。学生は基礎的な技術を自分のペースで習得でき、初回の訓練における不安の軽減が確認された。また教育効果を定量的に評価しており、犬の麻酔導入などのVRシミュレーター使用により、中核知識の定着において高いスコアを示した。

岐阜大学は、安価で切開・縫合が可能な手術ファントム（再利用可能なエラストマー臓器、止血・結紮機能、多臓器手術対応）を導入し、すべての学生が一連のワークフローを実践できる環境を整えた。初期試験では、パッドのみの訓練と比較して優れた理解度が示されており、今後は複数機関への導入が期待される。

宮崎大学は、家畜診療訓練（牛の難産、臨床検査）におけるVRとテキスト・ビデオメディアを比較評価した。その結果、相互補完的な強みや、能動的な動作による記憶保持力の向上、学生の高い受容性が示された。一方で、コスト、コンテンツの拡充、他メディアとの組み合わせの必要性についても言及している。

酪農学園大学は、食肉検査研修を段階的な準備（牛・豚のVRによる意思決定、アトラスを用いた病理学の統合、生体以外の材料を用いた実習）を中心に再構築した。これにより、実習教育を学生が卒業時に持っているべき能力（D1C）に合致させ、質保証を維持した適切な実習を実施している。

山口大学の教育DXプログラムでは、山口大学と鹿児島大学でのリアルタイム遠隔授業を可能とするマルチハイフレックス配信システムが紹介された。また、手術室や食肉衛生検査場など学生が入室しにくい環境の360°/3D VRシーンキャプチャを実現した。加えて、SwipeVideoを活用したマルチアングル動画や、データサイエンス教育を補完する複合現実（MR）ホログラム支援型ハンズオンシステムも構築している。

（3）まとめ

今後の生体を用いない獣医学実習を国内へ展開していくためには、まず大学ごとに異なる評価基準を整理し、複数施設で共通して活用できる「能力評価の枠

組み」を構築するとともに、デジタル教材の学習効果を裏付ける客観的なエビデンスを積み上げることが不可欠である。あわせて、高額になりがちなデジタルコンテンツを共有できる「オープンで安価な教材ライブラリ」を拡充し、大学間の格差を解消していく必要がある。また、現場の獣医学教員が新しい技術を円滑に導入できるよう、IT サポート体制の整備や教育トレーニングを統合していくことが必要である。その際、学習が学生にとって単なる「ゲーム攻略」のような娯楽に偏ってしまう「ゲーミフィケーション・ドリフト」を警戒し、獣医学教育の目的を常に中心に据えて運用する必要がある。そして、シミュレーターで習得できる範囲を明確に定義した上で、倫理的に管理された生体実習との最適なバランスを再定義することが重要である。

これらの課題を克服することで、日本における獣医学教育は、命を尊ぶ倫理観と、どの教育機関においても高い質保証がされた実習が可能な仕組みが構築される。今後は、学生の確かな技術習得を実現する次世代の実践的な教育実習モデルへと深化することが期待される。

4. 国際水準の獣医学教育の実現に向けた調査研究

1) EAEVE における獣医学教育改善の検討状況（鈴木）

担当：鈴木一由（酪農大・代表）、岡村雅史（帯畜大）、野中成晃（北大）、渋谷周作（山口大）、有村卓郎（鹿児島大）

(1) EAEVE 総会における獣医学教育改善状況

第 38 回欧州獣医学教育機関機構 (EAEVE: European Association of Establishments for Veterinary Education) の総会が、6 月 12 から 14 日にかけてアイルランドのダブリン大学獣医学部 (UCD: University College Dublin School of Veterinary Medicine) において開催され



た。会期日程は、12 日に総会(General Assembly)、13 日に教育シンポジウムと Gala Dinner、そして 14 日に関係施設見学であった。本会議の agenda を資料として添付する。GA では、EAEVE の Strategic Plan2025-2030 が提示され説明された

(https://www.eaeve.org/fileadmin/downloads/statutes/Strategic_Plan_and_SWOT_Analysis_2025-2030_final_for_GA_signed_.pdf)。現代の獣医学教育の中核原則であり、EAEVE によって強く推進されている **"Never the first time on a live animal"** は、欧州獣医学教育評価システム (ESEVT: European System of Evaluation

of Veterinary Training) 基準に組み込まれている。この概念は、学生が注射、採血、外科手術などの臨床スキルを、生きた動物で実践する前にシミュレータ等で練習することを義務付けているものであり、獣医学教育機関に対してスキルスラボや Virtual Reality (VR)教育の充実が求められている(2023-ESEVT SOP の徹底)。なお、今後の EAEVE 総会開催予定は、2026 年 5 月 28 日から 29 日にスペインのバルセロナ、2027 年 6 月 10 日から 11 日にフランスのナントで開催予定である。

写真は総会終了後に運営に携わった UCD 学生と EAEVE の会長である Prof. Dr. Petra Winter (ウィーン大学、右から 3 人目のピンクのスーツ) との記念写真である (<https://www.ucd.ie/vetmed/newsandevents/eaevgeneralassembly2025/>より)。

(2) 欧州獣医学教育認証大学連携協議会

本協議会とは、「帯広畜産大学、北海道大学、鹿児島大学、酪農学園大学は、活動状況報告と我が国の獣医学教育の改善に資する事業・方策の協議を行う場として「欧州獣医学教育認証大学連携協議会」を継続し、欧州獣医学教育認証の維持と推進について検討する。」という趣旨に基づいて設立され、原則として年 2 回の定例開催するものである。第 32 回協議会は、9 月 12 日(金) 13 時 30 分よりオンラインで開催された。主催大学は北海道大学であり、本協議会への酪農学園大学の参画の是非、並びに「欧州獣医学教育認証大学連携協議会の設置について」の一部改正について協議が行われ、酪農学園大学の参画と改正案が承認された。また、①EAEVE の本審査(FV: Full visitation)直前である鹿児島大学の状況報告、②2026 年 6 月に本審査(FV: Full visitation)を予定している VetNorth Japan(VNJ)の準備状況、並びに③VNJ の指摘として EAEVE 事務局長である Prof. Lekeux が来日されるのでその準備状況とスケジュールについて担当者より報告があった。

(3) 国内大学の EAEVE 教育認証受審及び改善状況 (2026 年 3 月現在)

a) 帯広畜産大学

北海道大学と一緒に VNJ として、2026 年 6 月 15 日から 19 日に本審査を予定している。前回(2019 年)の受審からの大きな改善点として、食肉衛生検査に関する実習における廃棄臓器の利用(4 年生)、道内と畜場での体験型実習の段階的受け入れ促進・2026 年度から全員必修化(5 年生)を行なっている。今回の FV に向けた改善点として学内食品加工実習施設内のと畜施設が公的に「簡易と畜場」として認定を受け、食肉検査員を委嘱された関係教員が食肉衛生関係の実習で教育を実施することとした。また、教育スタッフへの教育訓練プログラ

ムを学内 Moodle で運用を開始した。さらに、COVID-19 後の DX 化加速とそれに伴う教員往来減少による時間的・金銭的コストの削減を行なっている（岡村）。

b) 北海道大学

帯広畜産大学と一緒に VNJ として、2026 年 6 月 15 日から 19 日に 2 回目継続のための本審査を予定している。前回審査を受けて食肉検査場実習の充実を行なった。すなわち、北海道庁の協力を得て 2018 年より開始したと畜場での食肉衛生検査実習を徐々に拡充させ 2026 年度から全員受講の必修科目とした。また、2022 年度から VR を取り入れると同時に、食肉衛生検査用 e-learning イメージの蓄積と教育利用を開始した。コロナ禍の経験を経て、ハイブリッド授業システムおよび e-learning 教材を充実化も同時に行った。最近の改善点として、教育実施者（教員、外部講師、TA を含む）に対して、獣医学教育機関で教育活動を行うためのオンライントレーニングコンテンツを作成し、今年度後半から運用（トレーニング）を開始するとともに、EAEVE が 2024 年に改訂した Day One Competencies（D1C）に適応する新カリキュラムを作成中で、2027 年度から運用を開始する予定である（野中）。

c) 山口大学

2019 年の EAEVE 認証取得に伴い、国際水準の教育環境を整備した。次期サイクルについては、教育環境の現状を総合的に勘案し、現在のところ受審の予定はない。2019 年の前回受審後からの改善点は、外部施設（食肉衛生検査所等）との連携を深めるとともに、夜間診療実習の外部委託を新たに整備するなど、実習内容の確保を継続した。また、教育評価室（QA 室）の整備を継続し、学生組織（YUAVS; Yamaguchi University Association of Veterinary Students 等）との定期的な協議を通じて、学生の意見をカリキュラムや施設改善に迅速に反映させるサイクルを確立した。ここ数年では、文科省 Plus-DX 事業等の活用により、3D 骨格モデルや透過型ゴーグルを用いた遠隔ハンズオン実習システム等のデジタルコンテンツを拡充した。また、共同教育課程で使用する双方向遠隔講義システムを更新するとともに、学内の講義録画の配信用端末を増設・更新した（渋谷）。

d) 鹿児島大学

2019 年の前回審査から 7 年経過したため、2025 年 12 月 1 日から 5 日にかけて鹿児島大学単独で FV を受審した。今回の FV に向けて前回受審時の minor deficiency であった伴侶動物（犬、猫及び馬）の一次診療数を増やした。先般の受審による指摘事項については今後検討予定（有村）。

e) 酪農学園大学

2023 年 10 月に FV を受審し、伴侶動物（犬、猫、馬）の診療数及び伴侶動物の剖検数が卒業学生数に対して不十分であったことから 2024 年 7 月に再審査（RV）を受審し、2024 年 12 月に EAEVE の上位機関である ESEVT により EAEVE

認証取得の承認を受けた。EAEVE の"Never the first time on a live animal"のコンセプトに見合う教育を行うため、2023 年後期よりスキルスラボ棟を活用した本格的な「生体を使わない臨床実習（5 単位）」を開講し、"Never the first time on a live animal"のコンセプトを受けてスキルスラボにおけるシミュレーター実習でのみ臨床スキルを習得した学生たちが 2025 年より参加型臨床実習(18 単位)、総合病理診断学実習（2 単位）、食肉検査学実習（学外・1 単位）及び食鳥検査学実習（1 単位）により総合的な獣医技術の習得を目指したハンズオン・臨床実習を受講した。なお、本経過概要については2026 年 6 月に中間報告書として EAEVE 事務局に提出する。

(4) 世界獣医師会大会における獣医学教育国際化シンポジウム準備状況(2026 年 3 月現在)

第 41 回世界獣医師会大会 2026(The 41st World Veterinary Association Congress) が 2026 年 4 月 21 日から 24 日に東京国際フォーラムで開催予定であり、本大会において全国大学獣医学関係者代表者協議会（JAEVE）が共催して「獣医学教育の国際化 アジアの獣医学教育を世界水準に向上させる取組み」に関連したシンポジウムを開催する（4 月 22 日午後、座長：荻和宏明（北大）及び鈴木一由（酪農大）、第 7 会場（G502））。シンポジウムは冒頭に日本の獣医学教育の現状と課題（堀 正敏・東大）を紹介する。そして、メインスピーカーとして、EAEVE の紹介と国際認証のあり方について EAEVE 事務局長の Prof. Pierre Lekeux、ソウル大学の AVMA 認証取得状況について Prof. Myung-Sun Chun、及び東南アジアにおける獣医学教育の国際化についてカセサート大学の Prof. Khongsak Thiangtum に紹介いただく。その後、日本の国際認証に関連して鹿児島大学（有村）、VNJ（岡村）、山口大学（渋谷）及び AAVS（松脇・東大）の現状について報告する予定である。

2) アジアの獣医学教育改善の検討状況（渋谷・松脇・佐藤晃）

（2）-1 AAVS の概要と総会参加報告

① アジア獣医大学連合（Asian Association of Veterinary Schools, AAVS）

AAVS はアジアにおける獣医学教育の質的向上と学術的連携を目的として 2001 年に設立された獣医系大学の連合体である。現在 17 カ国から約 60 の大学が加盟しており、その規模は年々拡大している。AAVS は現在、アジア内の獣医学教育に関する国際的なネットワークのハブ機能を果たしている。設立当初は年 1 回の総会開催と加盟校間のメールによる情報共有に限られていたが、コロナ禍を契機に AAVS 内でも Web 会議やオンラインセミナーの開催が一般的となった。この技術的革新により、加盟校間の交流頻度や協働機会が大幅に増加し、

アジア全体での獣医学教育の連携と活性化に対する関心と意欲が飛躍的に高まった。AAVS 内には Veterinary Education Enhancement (VEE)、Veterinary Education Research (VER)、Animal Welfare Education (AWE)の3つのワーキンググループが存在し、それぞれのテーマに関する学術調査やウェビナーなどを実施している。現在 AAVS には日本から組織内最多の14大学が加盟中であり、執行委員会である Executive Committee には、毎年日本の大学が在籍している。さらには AAVS の事務運営を担う法人機関である AAVS Office は東京大学内に事務局が置かれているなど、同連合の活動において日本は先導的な立場を担ってきた。

② WOA, FAVA との連携

AAVS の活動は現在、国際獣疫事務局 (World Organisation for Animal Health, WOA) の支援を受けている。財務管理や HP 管理、加盟校との連絡などの AAVS Office が担当する業務の多くを WOA アジア太平洋地域代表事務所と共同で行なっている。これらの支援は、WOA と AAVS Office、さらに AAVS Office を実質的に運営している東京大学獣医学専攻の三者間で2021年12月に締結したMOU (2024年更新) に基づき行われている。

AAVS は2023年にアジア獣医師連合 (Federation of Asian Veterinary Associations, FAVA) ともMOUを締結した。アジア内での獣医学教育水準の引き上げと国際化を目指した活動や、ワンヘルスや薬剤耐性菌問題、食の安全などに関する取り組みについて提携していくことで合意している。2023年、2024年のAAVS年次大会はFAVAと共催でそれぞれ北海道とDaejeon (韓国) で行われた。

こうして築いてきた協力体制を基盤として、2025年にFAVA-AAVS-IVSA-WOA GEDSI (Gender Equality, Disability and Social Inclusion) Projectが発足した。IVSA (正式名称: International Veterinary Students' Association) は獣医学生の国際組織である。同プロジェクトはWOAの資金的な援助を受けながら、獣医師、獣医大学、獣医学生の三つの団体が協力してGEDSIの現状理解とその改善策について検討していくことを目的としている。このように、AAVSは現在、アジア内の獣医大学間をつなぐだけでなく、獣医学領域に関する他団体との協力体制も強めながら、アジアの獣医学教育、獣医療、およびヒトと動物の健康の向上を目指した活動を続けている。

③ AAVS 総会と VetEd Asia 2025

AAVS では毎年、年次総会と獣医学教育に関するシンポジウム (VetEd Asia) を開催している。2025年度はガジャマダ大学 (インドネシア) がホスト校となり、11月7-8日に同大学のジョグジャカルタキャンパス内にて第3回 International

Conference of Advanced Veterinary Science and Technologies for Sustainable Development (ICAVESS) と同時開催された。

総会ではまず AAVS を構成する組織（Executive Committee、各ワーキンググループ、AAVS Office それぞれの役割）の説明がなされた。続いて現在の加盟会員校数（上述）、年会費の支払い状況などが紹介された後、当該年度に新規加盟した 2 大学の自己紹介ビデオが放映された。その一つ Guru Angad Dev Veterinary and Animal Sciences University はインドからの初めての加盟校であり、AAVS のアジア内でのさらなる成長拡大が期待される。続いて前年度 2024 年度の会計報告が行われた後、AAVS Office と 3 つのワーキンググループそれぞれの活動が報告された。AAVS Office では会員名簿および年会費の管理や問い合わせ対応、HP の更新などの通常業務に加えて Newsletter の発行、Kei-Ichiro Maeda Memorial T&C Award の選出も行なっている。同 Award はアジアの獣医学教育発展に尽力する中で 2018 年に急逝した故前多敬一郎元東京大学教授を偲んでたまご&カンパニー株式会社（旧イセ食品）の支援を受けて設立された賞である。AAVS 加盟大学から、獣医学領域で顕著な功績を収めた若手研究者を選出・表彰している。今年度は東京大学と Mahidol 大学（タイ）から 1 名ずつ選出され、授与式と記念講演が行われた。

（２）-2 インドネシア 2 大学の視察報告

① ガジャマダ大学視察（2025 年 11 月 7 日）：

- 視察概要

ジョグジャカルタ市郊外のガジャマダ大学にて開催された AAVS 総会（2025 年 11 月 7-8 日）に合わせて、同大学獣医学部附属動物病院の視察ツアーに参加した。

- 実施内容

AAVS 総会の出席者を対象としたこのツアーでは、病院長の Dito Anggoro 氏（2024 年山口・鹿児島大学からなる共同獣医学研究科（山口大学）にて博士号取得）、Alfarisa Nururrozi 氏（2025 年同取得）をはじめとするスタッフおよび学生から、院内各施設について詳細な解説を受け、参加者との間で活発な質疑応答が行われた。

- 所見・成果

ツアー後、Anggoro 氏および Nururrozi 氏と意見交換を実施した。両氏は、日本での博士号取得が帰国後の大学教員としてのキャリア形成に大きく寄与していると述べており、今後も日本とインドネシアの学術交流に積極的に貢献したいとの強い意欲が確認できた。



② IPB 大学（ボゴール農科大学）視察（2025 年 11 月 10 日）：

- 視察概要

AAVS 総会終了後、ジャカルタ市郊外のボゴール市へ移動し、IPB 大学を訪問した。

- 実施内容および協議事項

- 大学執行部への表敬訪問：

Iskandar Siregar 副学長（国際関係担当）および、Deni Noviana 副学長（教育・学務担当：山口・宮崎・鹿児島大学による連合獣医学研究科にて博士号取得）と面談を実施した。インドネシアの獣医学部において博士号を持つ教員を増やす方針が示され、将来的な人的交流の拡大について協議した。



- 獣医学部教員との会合：

Amrozi 獣医学部長および Wayan Karja 副学部長（両氏とも連合獣医学研究科にて博士号取得）らと会合を実施した。会合では、渋谷（山口大学）と松脇（東京大学）がプレゼンテーションを行い、獣医学教育における両国の交流の歴史や、日本における最新の獣医学教育・研究の取り組みについて紹介した。



- 研究室および附属病院視察：

同大学附属動物病院の副病院長である Leni Maylina 氏（2023 年山口大学にて博士号取得）の案内のもと、獣医学部の各研究室および附属動物病院を訪問し、多数の教員と交流を深めた。



- 教育現場の視察：

当日開講されていた学部学生向けの講義風景を視察し、受講している学生達と直接交流を行った。

- 所見・成果

現地での視察および交流を通じて、以下の点が確認された。

- 教育・研究環境の相違：日本では発生がない、あるいは非常に稀な感染症が現地では見られる点や、インドネシア固有の多様な野生動物の保全活動に注力している点、ハラル要件を組み込んだ動物福祉や食品安全へのアプローチなど、日本とは異なる獣医学的課題と取り組みが確認できた。
- 日本との強力なネットワーク：IPB 大学獣医学部の教員の多くが日本での留学経験を有している。学生も含めて日本に対して非常に好意的な印象を抱いており、今後の継続的な交流において極めて良好な土壌があることが強く印象付けられた。

3) 米国獣医師会（AVMA）との意見交換（佐藤）

インドネシア・ガジャマダ大学で開催された第 23 回 AAVS 総会には、AVMA 獣医学教育委員会（COE）委員・CIVME 経営責任者代行（Dr. Ted Mashima）も参加した。そこで総会期間中に、米国における獣医学教育の現状と獣医学教育の国際的標準化に向けた検討状況、および国際獣医学教育評価ワーキンググループ（International Accreditation Working Group：IAWG）の活動状況等について意見交換を行った。

（1）AVMA における獣医学教育の改善状況

AVMA では、米国における標準的な獣医学教育として、4 年の教育期間を定めている。また、大学の責任として教育内容を一元管理し、少なくとも 7 年ごとに教育カリキュラム等を改定することを求めている。コアカリキュラムには、分子・細胞レベルから個体・集団に至る生物学的原理の理解に加え、診断・治療・救急ケアを含む実践的な臨床スキルと問題解決能力の養成が不可欠とされている。あわせて、公衆衛生や食品安全、人獣共通感染症のような社会貢献に直結する知識も網羅している。さらに獣医学教育においては、倫理・法律、コミュニケ

ーション能力、多様性への理解、経営管理スキル、そして動物福祉に対する責任ある態度を育む機会を提供し、これらを公平かつ統一された基準で評価する体制の構築を求めている。

これらの教育内容は、獣医学生が備えるべき能力（コンピテンシー）として示されており、獣医系大学の評価においては、その達成度が重要な指標となっている（その他、組織、財政、施設等、多数の項目が評価対象となる）。

（２）AVMA による獣医学教育の国際的標準化に向けた活動

AVMA では、世界的な獣医学教育の質を向上させるために国際獣医学教育評議会（CIVME）を設置し、教育レベルの底上げと標準化を推進するハブ機能を担おうとしている。CIVME 設立の背景には、近年、獣医療の高度化、動物や人の移動のグローバル化、新興・再興感染症の拡大があるにもかかわらず、国ごとに獣医学教育の質に大きな差があることがあげられている。CIVME は最終的に AVMA・COE を支援し、グローバルな教育基準の構築を目指している。

そのため、CIVME は以下の 3 つの柱を軸に WG を設置して活動している。

- ・教育のグローバル・ベンチマーク（基準）の策定：世界各国の獣医大学が参照できる、質の高い教育カリキュラムや評価方法のモデルを提示する。
- ・研究助成（グラント）の提供：革新的な教育手法や、国際的な教育連携に関する研究プロジェクトに対して資金提供を行う。
- ・国際的な獣医学教育ネットワークの構築：世界を北米、欧州、アジア、アフリカなど 8 地域に分け、それぞれの代表者が連携して情報共有や共同研究を促進する。

CIVME は、特定の国や地域に偏らないよう、世界中から選ばれた獣医学教育の専門家で構成されている。各ブロックから選出された地域代表者をプロジェクトごとに適正に配置し、臨床スキルのみならず、動物福祉、公衆衛生、プロフェッショナリズムを含む多角的な教育視点から議論を行っている。

CIVME の活動が進展することで、日本の獣医学教育が世界基準にあることが国際的に証明される可能性も期待される。これは、獣医師の国際的なキャリア形成や感染症対策における国境を越えた連携に大きく寄与するものであり、我が国の獣医学教育に携わる大学は、今後の CIVME の動向を注視しておく必要がある。

（３）IAWG の活動状況

IAWG では、米国、英国、欧州、オーストラリア、南アフリカの各地域の獣医学評価機関代表者が、教育評価の在り方や統一化について継続的に意見交換を行っている。また、一部の評価組織間では、認証の際の現地調査（Site Visit）を

共同で実施している。しかし、獣医師の活動は各国の政策によって規定されており、重点を置く教育分野は国ごとに異なるため、教育評価基準を世界一律に統合することは困難である。一方で、共通の「Day 1 Competency（卒業時に備えておくべき能力）」は教育分野によっては存在することから、その分野における相互評価や共同評価の可能性について、引き続き検討が進められている。

4) オーストラリアの獣医学教育について（鈴木）

Charles Sturt University 視察日程

担当：鈴木一由（酪農大・全獣協・国際化委員会副委員長）、佐藤礼一郎（宮崎大学）、高木 哲（麻布大学）

全国大学獣医学関係代表者協議会が主催する、「獣医学教育の国際化に関する業務」として The Australasian Veterinary Boards Council（AVBC）の獣医学教育認証並びに CSU の獣医学教育について情報を収集するために、オーストラリアの Charles Sturt University（CSU）へ出張したので報告する。

出張期間： 2026 年 3 月 3 日から 9 日（4 泊 7 日）

出張者： 鈴木一由（酪農大・全獣協・国際化委員会副委員長）、佐藤礼一郎（宮崎大学）、高木 哲（麻布大学）

出張先： School of Agricultural, Environmental and Veterinary Science, Charles Sturt University,

Locked Bag 588 Wagga Wagga NSW 2678 Australia

URL: <https://www.csu.edu.au>

担当者： **Marta Hernandez-Jover BVSc MSc PhD MVPH Mgt MANZCVS GCLTHE**

Dean of Veterinary Sciences

Professor Veterinary Epidemiology and Public Health

Jennifer Manyweathers BSc (Hons) BVSc (Hons) Grad Dip Sci Comm M Teach (Secondary) PhD MANZCVS

Course Director - Veterinary Science Associate Professor in Epidemiology

1. 出張日程：

月日	EVENT	宿泊
3 月 3 日（火）	各大学から羽田を経由してシドニー空港へ	機中泊
3 月 4 日（水）	SYD terminal 3 で鈴木、佐藤、高木が合流 QF 2225 SYD (1440)→WGA (1550)	Wagga Wagga 市内宿泊

	Dr. Manyweathers と空港で待ち合わせ後、市内ホテルへ移動	Astor Inn (1泊目)
3月5日(木)	Dr. Manyweathers がホテルから大学へ送迎 会議詳細は別表	Astor Inn (2泊目)
3月6日(金)	Dr. Manyweathers がホテルから大学へ送迎 会議詳細は別表。高木は午後 SYD 経由で帰国	Astor Inn (鈴木・佐藤は3泊目)
3月7日(土)	(高木) 羽田着後に麻布大学へ (鈴木、佐藤) Dr. Manyweathers が空港へ送迎、QF 2222 WGA (1025) → SYD (1135)。シドニーで鈴木は後泊、佐藤は帰国。	(鈴木) Silkari Urban CKS Sydney Airport Hotel
3月8日(日)	(佐藤) 早朝羽田着後に宮崎へ (鈴木) 早朝便で SYD 発、羽田を経由して札幌へ	

[Airport code] HND:東京国際空港、SYD:シドニー空港、WGA: Wagga Wagga 空港

2. Charles Sturt University 視察スケジュール

Thursday 5th March	Meeting place	Purpose	Who
8.45am – 10.30am	School of Agriculture, Environmental and Veterinary Sciences (SAEVS) Level 1 Meeting Room	Marta / Jennifer to pick up from Astor Inn Hotel (8.45am) Welcome and Introduction to the Veterinary Course	Marta Hernandez-Jover (Dean of Veterinary Sciences) Jennifer Manyweathers (Course Director Veterinary Science)
10.30 – 12.00pm	Meet at SAEVS Level 1 Meeting Room (& return guests to same location after tour)	Farm Tour Production Animal teaching discussion	Steve Wainwright (Director Farming Operations) Peter Howard (Senior Lecturer Livestock Production and Health) Dr Biju Balkrishnan (Lecturer Dairy Medicine)

12.00 – 1pm	Lunch - FoodBowl	Lunch	Marta Hernandez-Jover (Dean of Veterinary Sciences) Jennifer Manyweathers (Course Director Veterinary Science)
1pm – 2.30pm	Meet at FoodBowl, return Guests to SAEVS Level 1 Meeting Room	Tour of Veterinary Clinical Centre and Veterinary Diagnostic Laboratory	Cameron Collins (Clinical Director Veterinary Enterprises) Lori Blechynden (Veterinary Enterprises Manager)
2.30 – 4pm	SAEVS Level 1 Meeting Room	Accreditation discussion Transport to the hotel	Marta Hernandez-Jover (Dean of Veterinary Sciences) Jennifer Manyweathers (Course Director Veterinary Science) Sarah Teakel (Phase 1 Lead) Michelle Eastwood (Phase 2 Lead) Melissa Strong (Phase 3 Lead)
6.30pm	Dinner The Union Hotel		Marta Hernandez-Jover (Dean of Veterinary Sciences) Jennifer Manyweathers (Course Director Veterinary Science)

Friday 6th March	Meeting place	Purpose	Who
9am – 10.30am	Kay Hall Veterinary Teaching Hospital	Tour Small animal clinical teaching	Jake Fountain (Lecturer Small Animal Veterinary Practice)

10.30 – 11.30am	SAEVS Level 1 Meeting Room	Travel to campus and coffee break	Jake Fountain (Lecturer Small Animal Veterinary Practice) Marta Hernandez-Jover (Dean of Veterinary Sciences)
11.30am – 1.30pm	SAEVS Level 1 Meeting Room	Accreditation discussion (and working lunch)	Marta Hernandez-Jover (Dean of Veterinary Sciences) Jennifer Manyweathers (Course Director Veterinary Science)
1.30pm – 3pm	Pre-Clinical Centre and NaLSH	Tour	Joe Price (Manager, Animal and Field, Faculty of Science and Health) Charmaine Carlisle (Technical Manager, Life Sciences and Health Team)
3pm – 4pm	SAEVS Level 1 Meeting Room	Accreditation discussion Wrap-up Transport to the hotel	Marta Hernandez-Jover (Dean of Veterinary Sciences) Jennifer Manyweathers (Course Director Veterinary Science)

1. 出張の目的および視察選定の経緯（鈴木）

本出張における主要な目的は、1) AVBC 認証を取得するための基準が日本の獣医学教育の現状に見合っているのか、またはどの程度の教育改善が必要となるのか、および2) Charles Sturt University (CSU) の獣医学教育に関する視察である。CSU を視察対象とした経緯は、シドニー大学獣医学部の学部長（Head of School and Dean）である Prof. Dean Jaqueline Norris の紹介による。全獣協・国際化委員会では、2025 年 3 月にシドニー大学獣医学部の前学部長である Prof. Rosanne Taylor が来日して東京大学および北海道大学・酪農学園大学の 2 か所において AVBC に関する講演と視察が行われており、AVBC の詳細な調査を行うべく当初はシドニー大学を視察する予定であった。しかし、CSU が 2024 年末に AVBC の新規基準で認証を最初を取得したこと、またシドニー大学がこの新規基

準の認証を取得していないことから、Prof. Norris より CSU 訪問を推奨するとともに、CSU の獣医学コース Dean である Prof. Marta Hernandez-Jover を紹介された。

2. Charles Sturt University (CSU) の概要 (鈴木)

Charles Sturt University (CSU : <https://www.csu.edu.au>) は、シドニーを州都とするオーストラリアのニューサウスウェールズ州 (NSW) の Wagga Wagga にある。CSU の獣医学教育は、School of Agricultural, Environmental and Veterinary Science (SAEVS) が学部に対応し、その下に獣医学コースとして Veterinary Science, Veterinary Technology (動物看護師) 及び Equine Science がある。CSU 獣医学科の特徴として、Bachelor of Veterinary Biology /Bachelor of Veterinary Science の Double-degree プログラムであり、日本と同様に 6 年間の修業期間である。特徴的なのは、AVBC の認証だけでなく RCVS 認証に対応した、学生の自主性、ハンズオントレーニングを主体とした教育を行っている。CSU は地域や農村部のニーズに応えるため、家畜、馬、コンパニオンアニマル、野生動物など幅広い動物種に対応できるスキルの習得に重点が置かれており、卒業後は AVBC 認証取得大学であるためにオーストラリア、ニュージーランド、イギリス、香港、シンガポール、南アフリカで獣医師として勤務できる。オーストラリア国内でも 66 名の定員に対して 450 名以上の応募があり、高校 3 年の最終成績と試験によって算出される ATAR (Australian Tertiary Admission Rank: オーストラリア教育三次入学順位) のスコアが 90 点 (州の上位 10%以内) と面接によるコミュニケーションスキルや CSU 教育理念である生産動物獣医療修業意思の確認と意欲によって評価を受ける。

教育体制は、AVBC と Royal Collage of Veterinary Surgeon (RCVS)の基準を担保するだけでなく、低学年からの徹底的な農場実習と豊富な臨床実習による実践教育が行われている。獣医学部長である Prof. Marta Hernandez-Jover (右上写真) と獣医学科の Course director である Associate-Prof. Jennifer Manyweathers (右下写真) が中心となって獣医学教育改革と運営を進めており、それぞれの教育レベルに合わせて Phase 1 (基礎)、Phase 2 (臨床教育)、Phase 3 (参加型実習) の Director を配置して連携した実践教育が行われている。教員体制は、獣医学科に 51 名の教員 (Academia, lecture など)、獣医看護学科



には6名の講師（教授ではない）、馬学科に9名（教授1名の他は講師）が配属されており、これらとは別にスキルスラボの担当スタッフや実践的な参加型臨床実習を担当する臨床教員が配置されている。CSUは公立大学であるが、学費はInternational Student（留学生）でAUD \$72,080（約800万円）である。これがFull feeに相当する。CSUの獣医学部に入学したオーストラリア国籍の学生はオーストラリア政府からCSP（Commonwealth Supported Place）により差額が補填され、その結果、年間学費はAUD \$11,316（約125万円）程度である（注意：CSPは全学生が対象でなく定員制であるが、獣医学部の場合はほぼ全員がサポートを受けられる。成績によってCSP枠が確保されている）。

3. 教育農場におけるCSU獣医学生のハンズオン実習について（佐藤）

Charles Sturt University（CSU）の教育農場におけるハンズオン実習は、オーストラリアおよびニュージーランドの獣医学教育認証機関であるThe Australasian Veterinary Boards Council（AVBC）が求める獣医学教育基準を強く反映した教育プログラムとして構築されている。AVBCの獣医学教育認証では、卒業時に獣医師として必要な能力である「Day One Competencies（D1Cs：卒後初日能力^{注1}）」の修得が重視されており、特に実際の動物を用いた臨床技能教育の充実が求められている。CSUの教育農場は、この教育目標を達成するための重要な実習施設として機能している。

教育農場では牛や馬、羊などの産業動物が飼養されており、学生は講義で学んだ知識を実際の動物に対して応用する形で家畜の保定、身体検査、繁殖検査、採血、超音波検査などの基本的臨床手技を習得するカリキュラムが組まれている。学生は単に見学するのではなく、自ら動物を扱いながら手技を繰り返し実施することにより、臨床現場で必要とされる技能と判断力を段階的に修得することができる。

AVBCの認証基準では、臨床技能のみならず、動物福祉、家畜管理、公衆衛生、コミュニケーション能力など、獣医師として必要な幅広い能力を統合的に教育することが求められている。CSUの教育農場では、個体診療技術の習得に加え、群管理（herd health management）や飼養管理、栄養管理などの観点から家畜の健康管理を学ぶ教育が実施されており、産業動物臨床において重要となる群レベルでの疾病管理の理解を深める教育も行われている。

また、学生主体の学習を促進する教育環境が整備されている点も特徴的であった。教員および農場スタッフは実習の指導および補助者として学生の技術習得を支援しながら、学生同士のディスカッションや問題解決型学習（problem-based learning）を取り入れた教育が行われている。これにより、臨床現場で求

められる判断力、チームワーク、コミュニケーション能力の育成にも寄与していると考えられた。

今回の視察を通じて、AVBC の教育認証基準に基づいた CSU の教育農場実習は、学生が卒業時に実践的な臨床能力を備えた獣医師として社会に出るための重要な教育基盤であることが理解された。実際の家畜を用いた体系的なハンズオン教育は、獣医学生の実臨床技術習得に極めて有効であり、日本の獣医学教育においても今後その充実が重要であると考えられた。CSU における教育農場の活用方法は、我が国の獣医学教育の改善を検討する上で非常に参考となる取り組みであった。

注 1 : AAVMC と AVBC は USA English で Day One Competencies (D1Cs)、EAEVE は British English で Day One Competences (D1C)を採用している。D1C の和訳を「卒後初日能力」とする。

4. 伴侶動物診療施設における犬および猫の Primary Care 臨床実習について (高木)

Charles Sturt University (CSU) の小動物臨床の症例を用いたハンズオン実習は、Kay Hull Veterinary Teaching Hospital にて行われている。Kay Hull 氏は、現在は引退している地元選出の政治家であり、この CSU の教育施設のオープン(2010 年)を強く支援していたとのことである。余談となるが今回訪問した担当者の主要な部署のブレインを務めるのはすべて女性であり、Kay Hull 氏も女性政治家とのことである。かつては CSU の実習と専門家による診療を中心としていたがコロナ禍以降は専門診療が撤退し、現在はこの大学施設にワガワガ動物病院という 24 時間のプライマリケアの病院が入っており、動物病院は家賃を払って入居している。学生が実習するスペースとプライマリの獣医師が診察する部屋は完全に分けられている。2010 年の記録からこの施設は 330 万 AUD の費用をかけて建築されており、平屋 760 平米である。日本の一般的な動物病院と比較すると大きいが大学附属動物病院と比較すると小さいといった印象である。この病院は Australasian Veterinary Boards Council、Australian Small Animal Veterinary Association と the American Veterinary Medical Association の基準を満たしている。

CSU キャンパスにおける代替法などによるハンズオン教育の後半(フェーズ 2 とフェーズ 3)ではこの動物病院において学生は 1 クールを 5 名(時によって少ないクールもあるようだが)3 週間連続して実習を行う。この間学生の入れ替わりはないとのことである。かつては 4 週間であったということであるが、最終的に 2 週間に落とし込みたいという事であった。どうもローテーションが

組みにくいようである。この形式はオーストラリアの一般的な動物病院の働き方である週 40 時間勤務という労務管理を模したものであるということである。ここで学生はのべ 150 症例を担当し、毎診察ごとに quiz レポートをオンラインで提出し、これを教員が都度評価するということである。学生が実習期間中宿直ができるように動物病院内にキッチンやベッド（2 ベッド 2 部屋）を備えたエリアがある。宿泊研修中は症例の異変や外来があった場合には学生は電話で獣医師と連絡が取れるようになっている。また、学生とのラウンドルームが備えられていた。

診察室（5 つ）や手術室の設備については一般的な動物病院が備えているもので日本やアメリカのように最新の機器が導入されているようなものではないが、特に歯科については力を入れていると感じた。また、私見ではあるが高額な医療機器を用いた診療よりもあくまでもプライマリな診療や手術の基礎的な技術や経験をしっかりと教育しようという明確な意思が伝わってきた。当然のことながら動物の衛生管理や感染症発生時の対策や動線も考えられている。電子カルテで学生がその日何をやっているのかもすべて可視化されており、エビデンスが効率的に蓄積されている。

実際には教育をサポートするのに現場の様々なスタッフが支援しているが、ここでの実習教育をフォローする CSU の教員は 3 名ということで足りないとは思いますが非常にコンパクトかつ効率的にシステムが組まれていると感じた。ポリクリ教育に関して特に二次診療を中心とすると過剰診療になりがちな現状を鑑みると、学生教育は一般診療に特化するという考え方は非常に参考となった。

5. 我が国に AVBC 基準を導入する際の課題（鈴木）

AVBC の認証基準は、オーストラレーシア圏を中心としたものであり、オーストラリア及びニュージーランドにそれぞれ 7 及び 1 獣医学教育施設を主対象としたものである。圏外として City University of Hong Kong、Swedish University of Agricultural Science 及び Vetsuisse Faculty が認証取得している。繰り返しになるが、AVBC 認証取得大学であるためにオーストラリア、ニュージーランド、イギリス、香港、シンガポール、南アフリカで獣医師として勤務できる。「AVBC が認定する国際獣医資格」があり、これには RCVS、South African Veterinary Council (SAVC)、Veterinary Council of Ireland (VCI)、AVMA-CoE、Veterinary Council of New Zealand (VCNZ：ニュージーランドの国家試験制度)、American Association of Veterinary State Boards (AAVSB：米国獣医国家試験制度)、Canadian National Examining Board (NEB、カナダ獣医師国家試験制度)が対象となる。すなわち、**EAEVE 及び JUAA の認証を取得していても AVBC の国際獣医師資格としては認定されない。**

Summary of WIL requirement

Pre-Clinical WIL				
	Animal Husbandry	Pre-clinical Practice	Flexible	Total
Extramural Time	≥6 weeks	≥2 weeks	≥4	≥12 weeks
Clinical WIL				
	Intramural*	Extramural	Flexible	Total
Time	≥20 weeks	≥12‡ weeks	≥8 weeks	≥40 weeks
Total Pre-Clinical & Clinical WIL				≥52 weeks

‡ 4 weeks of the 12 weeks of Extramural Clinical WIL can be in veterinary professional, non-clinical placements

* Intramural Clinical = VEE-owned, VEE-controlled or VEE-contracted practices

AVBC 認証に基づいた CSU の獣医学教育は D1C に基づいた実学教育である。AVBC では Work-integrated learning (WIL：職業統合学習)として低学年の学外実習から参加型臨床実習に多くの単位と教育時間を割いている（図）。Pre-Clinical WIL（前臨床職業統合型実習）では、初年度から最終学年で行う参加型臨床実習の受講前に、学外（Extramural）で 6 週間以上の動物ハンドリング実習と参加型臨床実習の資格取得以前に 2 週間以上の臨床現場での実習、さらに 4 週間は flexible となっている。最終学年では、学内及び学外でそれぞれ最低 20 及び 12 週間の参加型臨床実習、並びに 8 週間の flexible の合計 40 週以上の実習が課せられている。なお、合計 12 週間の学外（Extramural）実習のうち、4 週間は非臨床系獣医専門職（食肉検査場、家畜保健所、研究所など）が必須とされている。CSU では、Pre-Clinical WIL は 1 年生から 5 年生までの夏季および冬季などの長期休暇中に学生が自ら実習先と交渉し、自己負担で実習を行うように指導している。同様に、CSU では、Clinical WIL の学外（Extramural）実習においても休暇期間中に学生が自ら実習先と連絡を取って経費自弁で実習するように指導している。

CSU の Clinical WIL は最終学年である 6 年生で実施されている。3 週間を Wagga Wagga 市内にある CSU の Primary care を主体とした伴侶動物病院（7 人の臨床獣医師と動物看護師）で 3 週間の臨床実習と、CSU の教育理念である生産動物獣医師育成に基づいた牛、馬、小型反芻動物を中心とした総合臨床実習を CSU の教育農場と動物医療センターで実施している。8 週間の flexible ではさまざまな選択を用意している。すなわち、我が国で AVBC 認証に基づいた教育を行うため

には WIL の最低必要条件を満たすために必要な教育体制、特に意識改革なくして成り立たない。

6. 結語（鈴木）

本視察の目的である「AVBC 認証を取得するための基準が日本の獣医学教育の現状に見合っているのか、またはどの程度の教育改善が必要となるのか」について、明確に AVBC の基準は日本の現状からはかけ離れており、抜本的な教育改善無くして認証を取得することは不可能である。そもそも、AVBC だけでなく、AVMA-CoE および EAEVE をはじめとする獣医学教育の国際的情勢は、学生主体で徹底的なスキルおよび臨床実習による Day One Competence 教育であり、それに応じて動物ハンドリング実習、ソフトおよびハードスキル実習、参加型臨床実習および学外実地研修に要する単位数がカリキュラムの多くを占めている。現行の vetES0 のコアカリキュラムと JUAA の認証基準に基づいて行われている日本の獣医学教育では AVBC の基準である合計 52 週間のハンドリング実習とそれに参加する学生が暴露される症例数を担保することは現状では不可能であろう。要約すると、現状を鑑みて、日本の獣医系大学が国際認証を取得しようとするならば、参加型臨床実習の最低基準として約 700 時間（45 時間で 1 単位の場合は 16 単位=16 週間）を課している EAEVE の方が 1 年の単位でハンズオン実習を課している AVBC および AVMA-CoE よりも妥当であろう。我が国の獣医学教育の国際化を推進する上で最も大事なことは、「AVBC など各国が認定する国際獣医資格」に見合う水準に vetES0 のカリキュラムおよび JUAA の認証基準を合わせることが肝要と思われた。すなわち、獣医学教育の国際化とは、日本の獣医学教育を世界水準化させることであり、現状にとらわれず柔軟な考え方が必要であろう。

5) まとめ（苅和）

今日の獣医学領域をめぐって、伴侶動物の獣医療の高度化、家畜における越境性感染症の流行、重篤度の高い人獣共通感染症の相次ぐ出現、薬剤耐性菌の世界的な分布拡大、国際的な食品の流通量の拡大など、多くの問題が生じている。こうした諸課題に対して、獣医師の国際的活躍が期待される機会が急速に増加していると考えられる。

50 年以上にわたって日本の獣医学教育改革の流れは継続してきたが、当初は日本の獣医学教育をいかに欧米の準に引き上げるべきかという観点から始められたように思う。いまだにこれが達成されたとは言い難いが、獣医学領域をめぐると、今日の世界的な状況を勘案すると、さらに獣医学教育の国際的な潮流を把握しながら日本の獣医学教育の改革を行っていく必要があると考えられる。

現在、日本の獣医学教育はモデル・コア・カリキュラムに基づく教育の実施により、学生にかなり高い水準の獣医学的基礎知識の教育が提供されている。しかし、世界的には、獣医学教育は実践的な体験型教育の充実が大きく進んでおり、獣医学的知識の提供に加えて、学生に Day 1 competency (卒後初日の実践能力) を確実に獲得させることを主目的とした実践的な獣医学教育が主体となっている。

海外の大学の多くは、アメリカ獣医師協会 (AVMA: American Association of Veterinary Medicine)、欧州獣医学教育機関機構 (EAEVE: European Association of Establishments for Veterinary Education)、オーストラレーシア獣医事会 (AVBC: The Australasian Veterinary Boards Council) などの国際的な評価機関による厳格な外部評価により、教育改革を継続的に進めている。日本においては、2019 年 12 月に VetNorth Japan (北海道大学と帯広畜産大学の共同獣医学課程) と VetJapan South (山口大学と鹿児島大学の共同獣医学部) が EAEVE の認証を取得した。その後 2024 年 12 月には、酪農学園大学も EAEVE 認証を取得した。これらの大学は認証取得後も国際的な基準に基づいて継続的な獣医学教育の改善に努めている。

また、東南アジアでは ASEAN 獣医療法定組織連合 (AVSBN: ASEAN Veterinary Statutory Body Network) を中心に、ASEAN 圏内の獣医学教育認証制度が創設され、その制度の施行に向けた準備段階にあるようである。本認証制度は国際獣疫事務局 (WOAH: World Organization for Animal Health, 旧 OIE) や AVBC の指導を受けながら制度の確立を図りつつある。また、アジア獣医大学連合 (Asian Association of Veterinary Schools, AAVS) は、アジア内の獣医大学間をつなぐだけでなく、獣医学領域に関する他団体との協力体制も強めながら、アジアの獣医学教育や獣医療の向上に努めている。

今後、各大学で獣医学教育の改善の取り組みを継続するとともに、全国大学獣医学関係代表者協議会などが中心となって、上記の国際的な機関との情報交換や連携を強化しながら、日本の獣医学教育水準の向上を目指すことが重要である。それにより、日本の獣医大学の卒業生が獣医師として国際的に活躍する機会が増えることが期待される。

5. 総括

本事業は、2011 年の「獣医学モデル・コア・カリキュラム (以下、獣医学コアカリ)」策定以来進められてきた改革をさらに深化させ、国際標準の獣医学教育に準拠した教育体制を確固たるものにするとともに、産業動物獣医師や公務員獣医師の慢性的な不足および地域的な偏在、18 歳人口が激減する「2040 年間

題」といった深刻な社会課題に対し、教育の側面から実効性・持続性のある獣医師の養成・確保を検討することを目的として実施した。

事業を通じて得られた知見として、まず教育体系に関しては、卒業時に求められる獣医師としての資質・能力（Day One Competencies：D1C）を軸とした「能力基盤型教育」への移行が、学生による知識の体系化や国際化の観点から極めて重要であるとの認識が共有された。また、産業動物・公務員分野の確保に向けては、低学年次からの早期暴露（アーリー・エクスポージャー）が将来の進路選択に直結する有力な手段であることが、先行事例の成果からも明らかとなった。さらに、人口減少や伴侶動物の飼育頭数減少等の社会情勢の変化を見据え、獣医師の広範な職域を横断するバランスの取れたカリキュラムを検討する必要性が示された。

一方で、改革を推進するうえでの課題も明確化された。現行の大学教員組織が「学科目単位」で固定されている状況では、科目の枠を超えた能力基盤型教育に基づく統合型コアカリの実施が困難であり、これを支える教員数の不足と教育負担の増大が大きな障壁となっている。また、現行の共用試験が学科目制を前提としていることや、D1C の獲得に効果的な獣医師実務現場での実習受入体制が十分に完備されていないことも課題として挙げられる。加えて、女子学生の増加に伴う労働環境の改善、ライフイベントに配慮した働き方の提示など、教育現場と実社会の両面において解決すべき課題が山積している。これらの課題を解決するためには、今後は以下の施策を段階的に実施すべきである。まず、当面は学科目制を維持しつつも、D1C との対応を可視化した「カリキュラムマップ」を導入することで、学生が自律的に学びを体系化できる環境を構築する。並行して、省庁や自治体と連携した出前講義やインターンシップを拡大し、これらをコアカリの一部として効果的に組み込むとともに、実習困難な分野への VR など ICT を活用した教材の導入や全 17 大学共有のオンデマンド教材の共同制作を進め、限られた教員リソースで質の高い教育を均一に提供するシステムを確立しなければならない。最後に、ステークホルダーや若手教員が柔軟に意見交換できる場を継続的に設け、社会の要請に応じ自律的に改善し続ける PDCA サイクルを構築することが、次世代の獣医学教育の在り方として強く求められている。